

臨床研究内容 ホームページ公開用

1. 研究課題名称

高齢大腿骨近位端骨折患者の術後嚥下機能低下はADLと在院日数遅延に関連する
～1年間のRetrospective study～

2. 研究の背景・目的

大腿骨近位端骨折は特に高齢者に多い骨折です。受傷後は、手術治療を実施し自宅生活への復帰や社会復帰に向けリハビリテーションを実施することが多い疾患です。大腿骨近位端骨折による直接的な影響により嚥下障害を及ぼすとは考えにくいですが、手術後の嚥下障害は、嚥下状態を考慮した食事や飲水を検討しなくてはならず、在宅復帰の阻害因子になることがあります。先行研究における嚥下障害の要因は、施設への入所や中枢神経疾患の既往、呼吸器疾患の既往、術後のせん妄などが挙げられています。また、大腿骨近位端骨折術後の嚥下障害を予防することは重要な課題ですが、嚥下障害の有病率の調査はあまりなされてなく、高齢者を対象とした場合には関連要因が不明です。

そこで、本研究では、高齢大腿骨近位端骨折術後患者を対象に、術後の嚥下障害の有病率やその関連要因の分析を実施することとします。

3. 対象者および対象期間

2021年9月から2022年9月の1年間に大腿骨頸部骨折で当院整形外科に入院した74例を対象とします。術後嚥下機能について評価を行い、保存治療を行った症例、術後に免荷が必要であった症例者、死亡症例を除いた57名を統計学的検討対象とします。

4. 研究内容

高齢大腿骨近位端骨折患者の嚥下機能をFOIS(Functional Oral Intake Scale)という評価指標を用いて評価します。術前と術後に評価を行い、嚥下障害があるかを分析します。嚥下障害がある群と嚥下障害のない群の2群に分類し、患者の特性や日常生活自立度、合併症などの臨床データから分析を行います。次に、多変量解析を用いて、嚥下機能低下に関連する要因を分析します。従属変数に嚥下機能障害の有無として、独立変数は、単変量解析で有意差を認めた項目(多重共線性を考慮)として多重ロジスティック回帰分析を実施します。

5. 個人情報の管理について

データの集計の際は患者名をコード化し、個人を特定できないように配慮します。

6. 研究期間

2021年9月から2022年9月の1年間

7. 医学上の貢献

高齢大腿骨頸部骨折患者の術後嚥下機能低下の有病率やその関連因子が特定出来た場合、関連因子に対して新たな取り組みができることが示唆され今後入院される患者の

治療成績向上に役立つものと考えます。

8. 研究機関

製鉄記念八幡病院リハビリテーション部

9. 連絡先（研究責任者）

上記研究対象期間において該当になる方で研究に対して不都合がある場合や研究に対してご不明な点がございましたら下記の連絡先まで連絡をください。

製鉄記念八幡病院リハビリテーション部 原山永世
805-8508 北九州市八幡東区春の町 1-1-1 TEL:093-671-9318